| | |
|---|---|
| 氏名・（本籍地） | 平間尚子（茨城県） |
| 学位の種類 | 博士（文学） |
| 学位記の番号 | 甲第122号 |
| 学位授与の日付 | 平成31年3月15日 |
| 学位論文題目 | 『法然上人伝法絵』の表現機構と思想信仰 |
| 論文審査委員 | 主査　大場朗 |
| | 副査　山本章博 |
| | 副査　林田康順 |
| | 副査　高橋悠介 |

平間　尚子氏　学位請求論文審査報告書

# 「『法然上人伝法絵』の表現機構と思想信仰」

論文の内容の要旨（１２００字以上）

【論文の大要】

本論文は次の序結と四章（十一節）から成る。

序章
第一章　『伝法絵』の諸本と研究史
　第一節　『法然上人伝法絵』の研究史―『善導寺本』作者問題を中心に―
第二章　『伝法絵』の表現機構
　第一節　『伝法絵』の出生場面を読む―『善導寺本』を中心に―
　第二節　『国華本』に描かれた「屋島・須磨」
　第三節　『伝法絵』和歌考―王羲之と鳥跡を中心に―
　第四節　『善導寺本』における絵解きの形跡―『説教かるかや』を手がかりに―
第三章　『伝法絵』の思想信仰
　第一節　『善導寺本』「霊山同聴法華」の意義
　第二節　『国華本』「此界一人念仏名」考
　第三節　『伝法絵』の臨終場面を読む―「如意臨席」を手がかりに―
　第四節　『善導寺本』和歌考―清水寺の観音・阿弥陀・大日如来の同体信仰を手がかりに―
第四章　『善導寺本』作者について
　第一節　『法然上人伝法絵』の和歌と作者―『善導寺本』の表現を手がかりに―
　第二節　奈良における湛空の活躍―『法華滅罪寺縁起』と『楢葉和歌集』を手がかりに―
結章
初出一覧

以上が論文の構成となる。次に論文の要旨を章節にしたがって記してみたい。

序章では、本論文の構成にそって各章節の執筆の意図と簡単な概要を示し、序としている。

第一章第一節は、「『法然上人伝法絵』の研究史―『善導寺本』作者問題を中心に―」と題し、本論展開の基礎とすべく、『伝法絵』の「主要諸本と作者」に関する研究史を的確に整理している。特に、副題にもあるごとく、作者に関しては、「四、作者躭空・湛空について」と「五、和歌に秀でた湛空」の二項を立て、作者説（躭空・湛空の同人説、別人説）に関する先行研究を踏まえた上で、論者の新たな論拠を提示して、「躭空・湛空の同人説」を指摘している。

第二章では、「『伝法絵』の表現機構」と題して、本文と絵の関係に着目し、そこから浮かび上がる諸問題に考察を加えている。

第一節では、『善導寺本』の「法然出生場面」の絵（上巻冒頭）に注目し、絵の象徴表現（弓を射る武士）と文脈が、上巻末尾「ゆみはり」の和歌二首と首尾照応する構造を論証している。その結論に基づき、和歌の作者が浄土教の信奉者であり、和歌の技巧に長けた人物であること指摘して、『伝法絵』の作者像の一端を明らかにしている。

第二節では、細見美術館蔵『国華本』の「屋島・須磨」の段（断簡）を取り上げ、絵と本文の関係を丁寧に読み取っている。特に本文中の和歌表現（独自和歌）に着目し、一首中に「なもあみたふ」の「折り句」を読み取り、それを活用して「殺生を生業とする海士」の救済を詠じた歌意であることを明らかにしている。

第三節では、法然の三七日忌の法要の際、湛空が王羲之の摺本を奉納して詠んだ和歌に考察を加えている。その結果、和歌に「王羲之」の名が詠み込まれていることに注目し、その用例を『万葉集』に確認するとともに、和歌の下の句に詠み込まれた「鳥のあと」の表現を『古今和歌集』仮名序末尾にも見出している。両者の用例から、当時「王羲之」「鳥跡」という文言が和歌の世界で尊ばれていた、と言及している。さらに、『源氏物語』「柏木」に、「鳥跡」の用例を踏まえて、柏木の死の文脈の中で用いられていることから、「鳥跡」が、死や葬儀と関わりのある文言であると推測し、法然三七日忌法要に結びつけている。こうした和歌の表現構造を踏まえて、この一首を詠ずることのできる人物は、和歌や物語に通じた人物、すなわち、湛空ではないかと作者説にも言及し章を結んでいる。

第四節では、「『善導寺本』における絵解きの形跡―『説教かるかや』を手がかりに―」と題して、「無品親王静恵」の病気平癒の場面に突如登場する童子「石金丸」に考察を加えている。論者は、「石金丸」が作中の重要場面二箇所（もう一箇所は「天台座主に誓文を送る場面」）に、法然上人に付き従う童子として登場することから、その重要性に着目している。その糸口として、論者は『説教かるかや』や『平家物語』の「石童丸」と比較して、三作品に共通する「念仏信仰を持ちながら、主人公に最後まで付き随う姿」「法然に戒を授かり、戒律を守る行動をとる姿」を見出し、「石童丸」と「石金丸」の親和性を指摘している。そして、『善導寺本』の二場面に「石金丸（石童丸）」を描いた意図は、絵解きにして悲話出家の話型にあやかって聴衆の心を掴むところにあり、『かるかや』「石童丸」のように念仏信仰を持ちながら、師匠に付き随う役割を担った人物として「石金丸」を書き加えたのではないか、と結論している。

第三章では、「『伝法絵』の思想信仰」と題して、作中表現の背後に認められる思想信仰についてまとめている。

第一節は、「『善導寺本』「霊山同聴法華」の意義」と題し、『善導寺本』巻一「比叡山讃嘆」場面と巻二「高倉天皇得戒」のくだりに、天台で伝えるところの有名な「霊山同聴法華」を踏まえた箇所があることを指摘している。論者はその指摘のみにとどまらず、「法然伝」にそれを取り込んだ事由へと考察を展開している。その結果、法然伝におけるこの話型のくだりは、「法然の円頓戒が、叡山における慈覚大師流の正統相伝であること」を語るために記されたもので、さらには、釈迦、慧思、智顗に連なる血脈の正統性を示すためである、としている。なお、論者はこの話を『隋天台智者大師伝』に基づいたものとの結論している。

第二節では、古態を残すとされる『国華本』を取り上げ、同本に記された「此界一人念仏名」の一節に考察を加えている。論者は、この文言が法照の『浄土五会念仏略法事儀讃』の一節で、平安時代の文学作品に散見されることを指摘している。また、この一節を含む『法事讃』が、慈覚大師円仁によって広められることや、このくだりが法然上人の説法の中で引用されていることから、伝法絵の作者が叡山の浄土教に関わる思想信仰を有していた人物であろう、と論じている。さらに、前節の「霊山同聴法華」の思想信仰を踏まえると、上巻が「霊山同聴法華」の思想、下巻が「此界一人念仏名」の思想となることから、『伝法絵』上下巻が、「天台浄土教」という同一思想で通底していると指摘する。

第三節では、『国華本』の法然上人臨終場面にのみ描かれた「如意を持つ僧侶像」に着目し、その僧が誰であるかを考察している。その結果、『隋天台智者大師伝』に、如意を持って師弟の間で附法が確かめられる「如意臨席」のくだりが認められた、とする。加えて、智顗晩年の夢に、臨終の際、慧思が見送ることを約束した記述も確認されることから、「霊山同聴」「如意輪席」「臨終の夢告」の三点すべてが『隋天台智者大師伝』による、と結論している。それを踏まえた上で、『伝法絵』の作者（湛空）は、『隋天台智者大師伝』の三点を自らの『伝法絵』に援用し、南岳大師慧思を臨終場面に描き、法然が叡山において師の叡空から授かった「円頓戒」が「慈覚大師正統の円頓戒」であり、法然が「正統相伝者」であることを明記した、とする。

第四節では、『善導寺本』上巻の「清水寺の仏と仁和寺入道法親王が同詠した和歌」を取り上げ、和歌の背後にある思想信仰を考察している。その結果、当時密教が醸成した観音との同体信仰、すなわち、「観音＝阿弥陀＝大日如来＝法華経＝天照大神」の信仰と重なることを指摘している。さらに、この結論の延長線に作者像をも見据えている。すなわち、こうした同体信仰を詠じた和歌を『法然伝』に収載でき、密教にも精通している人物は誰か、と問いかけて、その人物の存在を法然の弟子に求めている。その結果、「三密の法勝」「密学第一」と称され、歌僧としての活躍

が認められる二尊院湛空がその人物ではないか、と結論している。
第四章は、「『善導寺本』作者について」と題して、二節を立てて作者像に論及している。
第一節では、『善導寺本』上巻にある和歌二首に着目し、その解釈から作者像に迫ろうとしている。まず、第一首目であるが、歌に至る解説を踏まえると、法然出家の際に母が髪をなでながらその頂に涙を流しながら詠じた一首となっている。解説文（本文）はその光景を「秘密灌頂」であろうと結んでいる。論者は、この「秘密灌頂」の密教的表現に着目して考察を加え、最終的に「三密の法勝」「密学第一」と称され、歌僧としての活躍が認められる湛空が作者であろうと論ずる。二首目は、『善導寺本』巻第一の法然誕生の場面で、仏教伝来を語るくだりにある詠歌である。一首中に鶏の鳴き声「かけろ（可見路）」を読み込んだ歌で、「かけろ」の考察から『伝法絵』の作者像を浮かび上がらせようとしている。すなわち、「かけろ」の初出が「神楽」にあること、『国華本』『善導寺本』中の湛空作と見なされる八首、ならびに「王羲之」を読み込んだ一首等も加えると、歌謡・和歌の知識に明るい歌僧湛空が『伝法絵』の作者像として浮かび上がってくる、と結んでいる。
第二節では、湛空関連の資料として『法華滅罪寺縁起』と『檜葉和歌集』を取り上げ、考察を加えている。前者では、奈良・法華寺における尼僧への授戒の事績を明らかにし、後者では、奈良・京都の僧侶歌人が多く入集している『檜葉和歌集』中の「聖信法師」に着目し、この人物が正信房湛空である可能性を論じている。この両者の資料の考察から、歌僧湛空像を浮かび上がらせ、それをもって『伝法絵』作者・歌僧湛空説を補強している。
結章では、本論文の要点を簡略にまとめ結びとしている。

審査結果の要旨（１２００字以上）

【審査結果】
法然の行状を記した伝記・絵伝類は多数存在するが、絵巻の嚆矢とされるのが、『法然上人伝法絵』である。『伝法絵』は、法然滅期二十五年の嘉禎三年（一二三七）の奥書を有し、跋文には、本作品が祖師と結縁することを目的としていることや、絵を観る者、絵解きする僧侶両者への功徳が述べられている。また、後に制作された法然伝の半数は、『伝法絵』を底本として、増補・改訂されたと考えられている。
平間氏の論文はこれら現存する四種の転写本の中から唯一完本である『善導寺本』と古態を残す『国華本』（断簡）を中心に取り上げ、その表現機構と思想信仰という視座から種々の問題点を析出して解明を試みたものとなっている。中でも「絵」「本文」「思想」「信仰」の表現機構を精査して、四者の相互関係や作者について論及したものを、約七三二枚（四百字詰）の論考にまとめたものである。
平間氏の研究手法は、二伝本の本文を精読し、そこに潜在する種々の問題点を的確に抜き出し、作品の内外から取り出してきた豊富な例証と比較しつつ結論に導くという手堅い文献学的方法を貫いている。このため論拠は明快で説得力に富んでいる。したがって、本論文が抽出して解決に導いたところが少なくないのである。
以下、具体的に審査結果を報告したい。冒頭にも記したが、本論文は、『伝法絵』の「絵」「本文」「思想」「信仰」の表現機構を精査して、そこに潜む問題点を発掘し、これを豊富な例証と比較しつつ結論に導くという文献学的方法、実証的方法を貫いている。これによって『伝法絵』が有する問題点が次々と解き明かされ、新たに見えてきたところが少なくない。本論文の真価はまさにこの点にあるといえる。具体的には、これまでの『伝法絵』の研究が、宗学や仏教史学、美術史学を中心とした研究が多く、和歌を始めとする文学的見地からの考察は少なかった。本論文は、こうした未開拓の分野を取り上げ、問題点を解明している点である。特に、『善導寺本』『国華本』の背景にある天台浄土教に連なる思想信仰（霊山同聴法華・此界一人念仏名・如意臨席）を明らかにした点（第三章第一節から第三節）は大いに評価に値する。今後、決定的な反証が出ない限り、『伝法絵』の思想信仰に関する一つの論考となり得よう。また、『伝法絵』に収載された難解な和歌を取り上げて、解釈を提示した点も、本論文における画期的な成果の一つといえる（第二章第一節から第三節）。今後の「伝法絵和歌研究」の指標となろう。『伝法絵』の思想信仰と和歌解釈から迫った作者論に関する考察（第一章、第二章第一節・三節、第三章第一節～四節、第四章第一節・二節）も、刺激的で今後活発な議論が予想される論考となっている。堅実な論考となっているので、有力な新見となろう。独創的切り口から考察した論考に、第二章第四節「『善導寺本』における絵解きの形跡―『説教かるかや』を手がかりに―」、第三章第四節『善導寺本』

上巻の「清水寺の仏と仁和寺入道法親王が同詠した和歌」、第四章「『善導寺本』作者について」がある。いずれも興味深い論述であるが、論証・論拠をさらに手堅く加えていくことで、説得力のある好論となる。いずれにしても、独創的な手法が認められる論考と言えよう。

以上、本論文が解き明かした功績は上述の如くであるが、若干の章節に、表記・論述・構成の不備や資料不足、論旨の飛躍が存在する。たとえば、第四章第一節「『法然上人伝法絵』の和歌と作者―『善導寺本』の表現を手がかりに―」の「かけろ」の考察である。論者は、「神楽」の「かけろ」の用例のみで論証を展開している。やはり、資料不足が説得力不足に通じた例といえよう。同じく二節「奈良における湛空の活躍―『法華滅罪寺縁起』と『楢葉和歌集』を手がかりに―」も論述・構成の不備と論旨の飛躍が否めないところがある。特に歌人一覧の表記が冗長で、その目的が見失われる一覧となっている。また、『伝法絵』本文や和歌の解釈、すなわち、「同詠」の読みの再考（第三章第四節）や「南州・北州」の出典を踏まえた解釈の提示（第四章第一節）などである。このほか本論文を細かに検証していくと、こうした不備をいくつか拾うことができる。

このように、本論文中には若干の不備や資料不足が存在するが、「審査結果」の冒頭で述べたように、論者の独創的で堅実な手法によって『伝法絵』に内在する問題点を解明したところが圧倒的に多く、若干の不備等はことごとくその成果に吸収される。以上によって、われわれは本論文が課程博士の学位に相当する十分な資格を有するものと認定した次第である。

公表予定

| | |
|---|---|
| 日　程 | 平　成　　年　　月　　日 |
| 公表形態 | ①掲載誌名：【　　】【　　】号・巻　【　　】頁　【全文・要約】 |
| | ②単著（発行者） |
| 題　目 | <※タイトルを変更した場合> |